

ユンケルの家族は夫人鎌田信子と二人の娘の四人で、東京音楽学校に迎え入れられてから住いを横浜から東築地の居留地に移し、日本趣味豊かな生活をたのしんだ。学校にはいつもきちんとハイカラな洋服を着こなし、いわゆる男性的ヴァイオリニストと称され、指揮法に至ってはそのスタイルが良く、タクトの明快さは見る者に非常な美観を与えたというのである。また大変に社交家でチャ目気があって陽気な性格、華やかで賑やかなことが好きであった。東京音楽学校には外国人教師に対して天長節や宮中観桜の宴、外務大臣主催の夜会などへの招待がしばしばあって、ユンケルは必ず積極的に参加した。社交ぎらいなケーベル博士とは全く対照的である。このような性格は東京音楽学校内においても自然大きく影響し、他を圧する勢力をふるっていた。日本の管弦楽の父、あるいはオーケストラも合唱もユンケルなくしてわが国の音楽進歩はなかったと、その業績を賛える一方ではきびしい世間の批判も多かった。このことに関しては第二章第十一節を参照されたい。

(四) ノエル・ペリー Noël Peri (一八六五～一九二二)

在職期間 明治三十二年～三十七年(一八九九～一九〇四)

嘱託講師

担当科目 オルガン、和声、作曲

履歴(要約)

一八六五年八月二十三日、フランス、ヨンス県クルーヂ・ル・シャテル村に生れる。

一八八一年七月リヨン大学入学、文学を専攻。

一八八三年十月リヨン大学卒業、十月、パリの外国宣教会付属神学校に入

学、さらに十二月セーヌ県イッソンの私立哲学学院^{Lesly}に入学、この間音楽理論も研究する。

一八八五年七月哲学院卒業。

一八八八年(明治二十一年)六月外国宣教会付属神学校卒業、十一月宣教師として来日、名古屋市および長野県松本市において司祭をつとめるか

たわら語学の教師となった。明治二十九年(一八九六)より住いを東京の麴町区飯田町に移し暁星学校の音楽教師となり、また一方、日本人の雑誌『天地人』を創刊し、仏文書店「三才社」を創立した。明治三十二年(一八九九)十一月三十日、東京音楽学校に招聘されてオルガン、和声、作曲の授業を行うことになった。最初の一年は年報二百円であったが翌年は五百円となり、さらにその翌年は千二百円支払われている。三十五年本郷之町一の三四に転居、三十七年に本務上の都合で辞職した。東京音楽学校在職中、彼の指揮のもとにグルックの「オルフォイス」が上演されたことは有名である(「オルフォイス」の項参照)。明治四十年(一九〇七)当時の仏領印度支那(ヴェトナム)のハノイに行き東洋学院研究員となった。同時に印度支那大学の仏文学講座および東洋学院の日本語教授として活躍していたが、一九二二年六月十九日、ハノイにおいて交通事故にあい、六日後の二十五日に死亡した。ペリーは日本滞在中日本音楽の研究を専門的に行い、ことに能楽に関しては多くの著作を残した。主なものは『能入門』(仏文、『東洋学院學報』九号、一九〇九)、代表能十曲の解釈研究『東洋学院學報』十一号～二十号、一九一〇～一九二〇)、狂言十一曲の仏訳(Da revue Japan et Extrême-Orient, 1924 no. 4-9)、『枕草子』および『東海道中膝栗毛』の仏訳草稿「日本音律論」(『パリ・ギメ』博物館音楽叢書』第二巻、一九三四)など。ほかに仏教、哲学、日本語問題、東洋学などにわたって多数の論文がある。また東京音楽学校における楽式の講義録『楽式一班』^(Lect)という草稿が東京芸術大学附属図書館に保存されている。

(五) アンナ・ラー Anna Laehr (一八四八～?)

在職期間 明治三十三年～三十八年(一九〇〇～一九〇五)

嘱託講師

担当科目 ピアノ

履歴(要約)

一八四八年三月十九日、ドイツ、ブランズウィックに生れる。父からピア

ノの手ほどきを受け、父の没後ベルリンで研鑽を積んだ。

明治十二年(一八七九)、横浜のドイツ領事の紹介により来日し、海軍楽隊の女流ピアノ教師となった。住所は芝区芝公園十二号六の一。東京音楽学校には明治三十三年(一九〇〇)一月四日付でピアノの嘱託講師となった。最初の報酬は年報三百六十円であったが、同年三月三十一日付で年報六百円になっている。三十八年(一九〇五)三月三十一日依願退職。

(六) ヘルマン・ハイドリッヒ Hermann Heydrich (一八五五)

(?)

在職期間 明治三十五年〜四十二年(一九〇二〜一九〇九)

嘱託講師

担当科目 ピアノ、和声、作曲、合奏、オルガン

履歴(要約)

一八五五年六月三日、プロシヤ国(ドイツ)ノイエンプルクに生れる。幼時より音楽にひかれ、ピアノおよびヴァイオリンの個人指導を受ける。シャロットテンブルグにおける帝国附属高等学校にて普通教育を終える。一八七〇年十月、ベルリン帝室附属音楽学校に入学、ピアノ、楽理および作曲を専攻する。

一八七四年同校を卒業、校長のヨゼフ・ヨアヒムの推薦で英国最古の学校といわれるアップリングハム Uppingham 学校の音楽ならびに唱歌指揮者となった。同校に六年間在職したのちドイツに帰り、一年間ピアノの研鑽を積み、再び英国に渡ってロンドンを本拠に演奏活動のかたわら、ロンドン府音楽学校の教務担任者の職についていた。

明治三十五年(一九〇二)一月十一日東京音楽学校に雇い入れられた。この人事については在独特命全権公使井上勝之助の尽力によるもので、そのかげの苦勞を物語る井上公使から外務大臣小村壽太郎宛の書簡が残っている。

本年六月二十二日送第六三號信ヲ以テ曾禰前任大臣ヨリ文部省直轄東京音楽學校音楽教師備入ノ義ニ關シ文部大臣ノ依頼ニ基キ條約案相添へ申越ノ次第有之候処本使ニ於テハ素ヨリ音楽教師ノ技倆等ノ判定スルコト難キニ付普國文部大臣ニ面談ノ上條約案ノ要点ヲ示シ可然人物ノ推薦方ヲ依頼致置候処同大臣ニ於テモ色々詮索ノ末「ヘルマン、ハイドリッヒ」(Hermann Heydrich)ナルモノヲ以テ適任者ト認メ且ツ同人ハ日本ニ赴キ度希望ヲ有スルヲ以テ至極恰好ナレドモ何分規定ノ旅費俸給ニテハ訂約致難ニ付月俸ヲ四百円ニ赴任旅費ヲ千円ニ増加セラレ度旨本人ニ於テ申出候趣將又現約案ニテハ到底適任者ヲ得難カルヘキ旨同大臣ヨリ申越候而本使ハ其旨本月二日付貴大臣經由電報ヲ以テ文部大臣ニ申報シ俸給及旅費ノ増額ヲ稟議候次第ニ有之候之レニ對シ本月七日發貴電第三十二號ヲ以テ文部大臣ハ豫定約案以上ノ増額ヲナス能ハサル旨及音楽學校長ハ当國ルードウキヒスブルグ居住「ツウキスラー」ナルモノヲ推薦致シタル趣來報相成候處右「ツウキスラー」ハ最前渡邊音楽學校長ヨリ在伯林日本公使館ニ於テ契約條件ヲ觀ルベシトノ電報ニ接シタル趣ヲ以テ條約案ノ一見ヲ求メ候ニ付早速相示シ候処如斯條件ニテハ到底備入ニ應スル能ハサル旨申出候然ルニ一方ニ於テハ普國文部省ニテ前頭「ハイドリツヒ」ヲシテ我條件ヲ承諾セシメント力シテ本契約満期后更ニ備繼ニモ相成候節ニハ月俸四百ニ帰國旅費ヲ千円ニ増加ノ義相協問敷哉ト本使マテ申出候ニ付本使ニ於テハ今日左様ノコトヲ約定スルノ地位ニ在ラサルモ帝國政府ニテ同人ニ満足シ更ニ雇繼ノ如キ場合ニハ其辺ノ事情篤ト斟酌相成候様本使ヨリ稟申致スヘキ旨相約置候処當國文部省ヨリ其趣本人ニ傳ヘタリト見ヘ遂ニ右「ハ